

# REMINISCENCES

## 脂質・胆汁酸研究を導かれた、二人の我が恩師

東京医科大学 茨城医療センター 松崎 靖司



### 我が恩師；大菅俊明先生

私の研究のライフワークである脂質・胆汁酸研究を導いてくださった恩師はお二人いる。お一人は、筑波大学名誉教授であった大菅俊明先生である。我が恩師大菅先生がご逝去され、あっという間に七回忌も過ぎてしまった。改めて時の流れの速さを痛感する。

私とはとにかく、先生からよく叱られた。私ほど、烈火の如く怒られたものはおそらくいないのではないだろうか。多くの方々が大菅先生は温厚で、物腰柔らかいと考えておられると思う。しかし、内面は大変芯が強く、激しく、信念を持ち真っ直ぐに生きておられる先生だった。「物事には筋が通ってなければいけない」「妥協を許さず」が心底の理念であり、やわな私などいつも木っ端微塵に打ち碎かれるのであった。

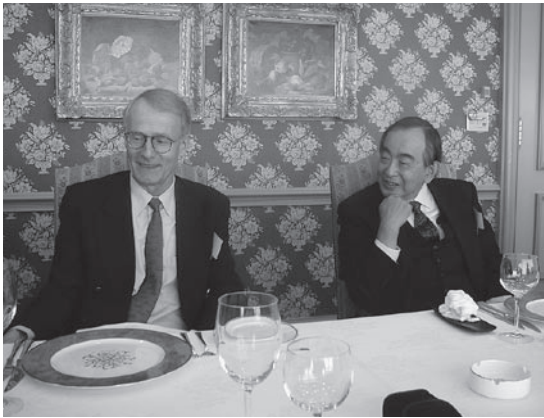
論文作成に際して私がよく言われたことは、「文章のストーリーがなっていない」「結論がぼやけている」、「論文を書くときは、まず、ストーリーの枠組みを簡単に作成し、論点のメモを作成すること」「一人よがりにならず、相手を納得させるように書く」など、よく叱責された。私は今、若い人に対しできる限りこの理念を、伝えるように努力はしているつもりである。

また、我が国の学問が諸外国より遅れていることを昔から嘆いておられた。科学的な論拠を持った仕事が少ないと言われた。世界での先生のご活躍ぶりは私ども弟子たちにとっては大変啓発されるものがあった。しかし「ただ外国だけに目を向けてはいけない、国内でもきちんと活動をするように」と指導を受けてきた。バランスを絶えず考慮されておられたことを思い出す。学会発表を行うことより、論文

作成が大事なことは当然のことである。しかし、私が大学院を終え、研修医をしていたころ、愛媛大学の故太田康幸教授が、肝臓学会総会の会長であった時のことである。プログラム委員会の席上、我がグループ（筑波大学時代）の提出演題は全滅で、私の演題が補欠。会議の席上バランスをとることから、繰り上げて私の演題を採択することとなったと聞かされた。満座の席上で大恥をかいと怒られた。この時以来必ず、主要学会には演題を出すよう努力してきた。これも、グループの activity を考えてのことであることは、いうまでもない。海外へはできる限り積極的に行くよう勧められた。このようにこと細かく学問の指南をしていただいたことが、昨日のこのように思い出される。

### 先生の最後の研究業績；肝癌に対する陽子線療法

さて、先生のご業績は多々ある。胆石の成因論、胆汁酸研究では「世界の菅」といっても過言でない。本分野における欧米の著明な研究者の方々には、みな“Toshi!”と呼び親交がとても深い。しかし多くの業績の中でも筑波大学時代における先生の最後の臨床研究は、高エネルギー物理学研究機構との共同研究としての、陽子線治療の肝細胞癌への治療応用であった。陽子線のピークと特性を考えれば、肝硬変合併肝細胞癌に利用できるであろうという発想からだった。以前、小職がこの内容に関しては本誌に投稿したので、詳細は割愛する。世界で一番の陽子線治療の症例数を持つ、マサチューセッツ総合病院の放射線腫瘍学の H. Suit 教授は我々の成績を見て「Kamikaze therapy!」と絶賛された。臨床試験が開始されたころの時代がまだ、EBMに基づく医学の確立がしっかりしていなかったこともあり、コ



二人の恩師 日本消化器病学会総会にて；旭川、2002年4月

ントロール試験でないのが今となつては残念なスタートであった。

### 先生の遺言

大菅先生は、陽子線の成績をまとめている時、「国民の税金を使って研究させてもらっているのに、きちんとまとめないことは、国民を冒涇していることだ。しっかりしろ」と言われていた。

とにかく、多くの治療患者さんの成績をまとめ、肝細胞癌の陽子線療法の区切りをつけるよう言われた。先生の病床にて、ある時「俺もこの治療に命をかけている」と言われた。本当に、心底心を込めて臨床研究をやってきたことと、自分には時間がなく、「俺の命がつきると、まとめあがるのがとどちらが先かわからない」という2つのメッセージが込められていたと思う。私には、「自分は論文を見るには間に合わないだろう」というお気持ちが伝わってきた（文献；Clin Cancer Res. 2005 15;11(10):799-805.）。

私と交わした最後の言葉は、「くやしいぞ、松崎」「論文は相手を納得させなければならない」であった。これが大菅先生の私への最後の指示であり、遺言となってしまった。

### 米国での恩師；Hans Fromm 教授

小職は、1995年に米国ワシントンDCにある、

George Washington University へ留学した。恩師、大菅先生の海外の親友である、故 Hans Fromm 教授のもとで仕事をした。米国での恩師となったのが、Hans であった。二人は親友ということから、米国滞在中をはじめ、もちろん帰国後の渡米に際しても大変親身に面倒を見ていただいた。ドイツ生まれで、医師になり米国へこられた。日独という関係もあるのか、メンタリティーがお二人とも似ておられ、小職にとっては米国の大事な恩師である。お二人とも、脂質・胆汁酸研究に生涯をかけ、活躍された。今日の小職があるのもお二人のお力とと思っている。Urudeoxycholic acid という、今ではC型肝炎の治療にも使われるようになった、胆石溶解剤として知られる胆汁酸製剤にも心血をお二人は傾けられた。この分野は地味であるので、学会などでは表舞台にはあまりでない。現在は、脂質代謝は発癌などを考える上で大変重要な課題となってきた。

### ライフワーク

我が恩師は、学会で皆がやっていることもキャッチアップし、実行するように言われた。しかし、地味であっても一つのライフワークとして、多くの肝臓研究者がやっていない分野、脂質・胆汁酸代謝は継続して行くように諭されたことを昨日のこのように思い出す。お二人とも残念ながら、天国へ召されてしまった。天国より現在でもこの研究分野は忘れ去られたものではなく、継続されていること、喜んでおられることと思う。

私は、お二人の先生の弟子であったことに大きな誇りを感じている。大菅俊明先生、Hans Fromm 先生のご冥福を衷心より祈念いたします。

合掌

#### 近況

小職は、現在、東京医科大学茨城医療センターのセンター長（院長）となり、毎日病院管理をしております。

自分の専門の消化器内科に関しては、科長は准教授へ移し、肝臓外来のみ行っております。忙しく、きつい毎日を送っております。